

平成 29 年度 第 1 回山梨県職業能力開発審議会 議事録

日時：平成 29 年 8 月 29 日 (火) 午後 1 時 30～4 時 30 分

場所：県立産業技術短期大学校塩山キャンパス 1 階会議室

1. 開会

2. 産業労働部次長あいさつ

3. 会長あいさつ

4. 議事

(1) 産業技術短期大学の在り方について

～事務局説明～

【議長】

ただいまの説明について、ご質問ご意見をお願いします。

【委員】

資料 1 の円グラフで、産短大を選んだタイミングについて高校入学前が 1 名カウントされているが、これはどういう理由で高校入学前から産短大に入ろうと考えていたのかわかっているか。

【事務局】

こちらについては地元の方で、産短大のことをよく知っていたことから、高校入学前から産短大に入りたいということを考えていたというもの。

【議長】

よろしいでしょうか。他の方はいかがでしょう。

【委員】

平成 32 年に甲府工業高校専攻科の開設があるとあるが、産業技術短期大学校ができたときの目的と、甲府工業高校に専攻科をつくる目的との棲み分けをちゃんとすることによって、それぞれが良い方向に行くと思いますし、そうでなければ両方つぶれてしまう場合もあると思いますので、しっかり整理していく必要があります。それから、色々な新しい技術ができてきているので、それに対する設備投資についても、学校に対してしっかりとっていった方が良いのではないかと思います。

【事務局】

ただいまのご意見についてお答えします。まず、甲府工業高校専攻科の開設による棲み分けについてですが、お手元の資料の 69 ページをご覧ください。こちらは平成 27 年度に山梨県産業人材育成検討委員会で検討を行った際の資料になっております。その際には、研究・開発、製造技術、生産工程と見たときに、製造技術に、人材育成として足りない部分があるので、専攻科を設置するというような結論としたところであります。産短大につきましては、その右側にあります通り、生産工程から製造技術のうち管理を担う人材の育成機関として評価が高いとなっており、専攻科が製造技術のうち設計を担う人材を中心に育成するということと棲み分けが一応の整理がされています。そうは言っても、わかりにくいところがありますので、一般県民の方々、また高校生に、どういう人材を育成するのかということ、分かりやすくしていく必要があるのではないかと考えており、前回の審議会の意見にもございました通り、何々の資格が取れるという形で明確にするなどしていく必要があると考えています。それから、その他の棲み分けとしましては、甲府工業高校専攻科は工業系高校からのみ学

生を受け入れますが、産短大は工業系高校からも受け入れますし、普通科高校からも受け入れるということなので、幅広い学習歴をもつ方の受け入れを行うという違いがあります。

次に、設備投資の関係ですが、こちらについては産業技術短期大学校が厚生労働省の所管の施設になっておりまして、厚生労働省の補助金がでることになっておりますので、県の負担と合わせて、整備を行うこととしております。

【委員】

本日は、産短大における教育の在り様をつぶさに見させて頂きましてありがとうございました。先生方のご尽力されている様子を拝見して感服いたしました。それで、在り方検討についての意見ですが、私どもの立場ですと、学生が経済的に困窮しているということについては、非常に目の当たりにしておりまして、現実として7割の学生がバイトをしておりますし、奨学金についてもないと困るという形で聞いておりますので、産短大の学生さんがどういう状況かについては、私は把握できておりませんが、経済的支援というのは非常に良いのではないかと思います。それから諏訪東京理科大の公立化や、同様の全国的な動きについても、経済的な問題というのも大きいのではないかと思いますので、その観点からの検討は必要ではないかと考えております。

あと一つ、イメージという言葉が何か所かではありますが、教育の中身がわかっている産短大の先生方の視点からのイメージとか、学生さんの視点からのイメージとか、いろいろな方向からの意見を聞いて考えていく必要があるのではないかと思います。

【議長】

今の意見に関してですが、産短大は、学費は4年制大学などよりも経済的ですが、有利子の貸付制度しかなくて、文部科学省所管の学校で受けることができる無利子の貸付制度がありませんので、希望する方全員が無利子の貸付を受けることができるような制度について、県に検討をお願いしたいなと思っております。できるだけ文部科学省所管の学校の学生に比べて不利にならない経済的支援というのは必要だと思います。他の方がいいがでしょう。

【委員】

現状の課題と整理で、定員の話とかイメージの話とかあったと思うのですが、資料の2ページの進路決定の理由のところ割と気になったのは、「専門的な知識・技術が習得できる」ことは当然大事だと思うのですが、「指導体制が充実している」とか「施設・設備が整っている」とか、あるいは「学校の雰囲気明るくてよい」といった理由が、進路決定の理由として割合が低くなっているところ。この点について、なんとかしていかなければいけないのではないかと、私は思います。あと、「進路指導教員の勧め」については、専門高校からの学生のデータが4.8パーセントということで、専門高校の先生方からあまり勧められていないということですので、専門高校の先生方に勧めただけするようにしていくということも今後課題なのではないかと思います。こういったところに課題がはっきりとでてきていると思いますので、ぜひこうした点について検討していただいた方がいいかなと思います。

【議長】

ありがとうございました。校長先生の方からなにかございましたらお願いします。

【産短大校長】

ご指摘の指導体制、施設につきましては、私どものPR不足という部分もあるかと思いますので、様々な形で対応していきたいなと思います。ここでは「進路指導教員の勧め」により進路決定をした割合は低くなっていますが、学生たちが産短大を知ったきっかけは、担任の先生、学年の先生というのが圧倒的に高く、2番目が親、知人という形となっており、ホームページとかパンフレットで知ったという割合は本当に低くなっています。ですから、そこが情報源になっていると思いますので、高校の先生方によく知ってもらい、高校の先生方から説明してもらおうという形が一番良いと思ってい

ますので、教員からの勧めにより進路を決定する割合ももっと増えるようにしていきたいと考えております。

【議長】

ありがとうございます。

【委員】

一つは、産短大の認知度をもっと上げるにはロボコンなどへの参加が有効なのではないかと思いました。高専のロボコンなどは有名ですので、全国的な大会などに積極的に出ることによって認知度を高めることができるのではないかと思います。

また、今、お話がございましたが、やはり高校の担任の先生に知っていただくことは大事だと思います。特に普通高校、工業高校など、様々な学習歴の学生が入ってくるようですが、普通高校出身の学生と、工業高校出身の学生では基礎知識が違いますので、同じカリキュラムで指導していくとついていけない学生もでてくるのではないかと思います。そういうところも踏まえ、本日見学させて頂いたような形で、先生方にも実際に見ていただくというようなこともPRとしては必要ではないかと考えております。

もう一つは、現在の求人状況では土木・建設は、非常に売り手市場で、なかなか人が集まらない状況にございます。そういった中で、そういうところへの人材育成についても学科として設置していただけたらというのがお願いであります。

【事務局】

まずロボコンへの参加についてですが、産短大においてもいろいろなイベント、コンクールには参加をさせていただいております。ただ、なかなか一般の方々に知れ渡っていないということは、まだ不十分な点があるのかなと思いますので、より県民の方の目にとまるような形で、そういったイベント参加ということを効率的に取り組んでいきたいという風に考えております。

また高校の先生方に来ていただくということについても進路指導の先生方とか、担任の先生方にも学校に来ていただいて、学校のPRを行う取り組みも行っているところではありますが、そういうところも工夫して、効率的に先生方に周知させていただき、それが高校生に伝わるような形をとって行きたいという風に思っております。

最後に人手不足の関係で、土木・建設関係もというお話についてですが、これにつきましては、県土整備部の方で、建設産業担い手確保・育成地域連携ネットワーク構築支援事業などにより取り組んでおりますので、そういう希望のあったことについては県土整備部の方にも伝えさせて頂きまして、産業労働部も連携しながら対応していきたいと考えております。

【議長】

ロボコンも全国放送されるのは、高専ロボコンなのですよ。ですので、全国の職業能力開発施設によるコンクールがあると良いのですが。いずれにしても、先生方がPRにご苦労されているというのは定員充足にかかる取り組み資料からわかるのですが、私どもですら、ロボコンやまなしに参加されていることなどを知らなかったということもあります。本日、先生方に教育内容などについてご説明頂きまして、2年間で一連の勉強ができるように非常によく考えて、カリキュラムが組まれており、非常にご苦労されていることがわかりました。先生方が学生を指導しながら、PRに時間を作るのもなかなか大変だろうなという感じがいたしましたので、もう少しPRの専門家を入れたりして、産短大をもっと県民に売り込んでいくということについて、ご検討いただけたら良いのではないかと思います。他の方いかがでしょうか。

【委員】

定員に満たないという生産技術科とか電子技術科の求人が10倍を超えているというのが現状で、

ミスマッチというのでしょうか、学生が定員に満たなくて、そういう人材を欲しいという企業はたくさんいるというのが現状ですので、もちろん経済団体ですとか、個別の企業とのコミュニケーションも既に取りていることとは思いますが、さらに連携を深め、PRを強化していただきたい。

こういったところで、学生の希望分野と企業側が求める分野が合致しているのは、やはり電子の技術者ではないかと思えます。第四次産業革命が着実に進んでいますから、そういう中で、AIやそういう技術が進歩することで、いわゆる単純作業の技能者は減るかもしれませんが、結局、AIは人が開発をしていくわけですから、そういう部分の技術者は今後ますます必要度は増してくるわけです。そういう人材を育成する力がこの学校にはありますから、ぜひそういった人材育成を行って頂きたい。特に、県内において企業数の99%を占めるいわゆる中堅企業、中小企業では、人手不足が深刻化しております。ですから、やはり中堅企業向けに人材育成を行ってほしい。文系の人材については、山梨学院大学が非常に人材を供給してくれていますから、助かっておりますが、技術系の場合は、山梨大学ですと、なかなか県内に就職してくれない。そういったところを産業技術短期大学校、あるいは甲府工業高校の専攻科でぜひ人材供給を行って欲しい。県内の機械電子工業は人材の吸収力をもっていますので、期待をしておりますのでよろしくお願いいたします。

【事務局】

PRの件についてですが、やはりホームページ1つをとっても職員がやるのではなかなかうまくいかないというところもありますので、そういったところをなんとかしていかなくてはいけないという風には思っております。またPRの重要性というところでも、全対象者に産短大のパンフレットを配布した3ヶ月後に調査を行ったにもかかわらず産短大の認知度が、前回調査に比べてあまり改善されていないという結果であったということを踏まえ、やはりただパンフレットを配るだけでなく、何か違う工夫が必要だということで、やはりPRというのは、高校生の立場とか保護者の立場に立ったうえでやるということが重要だということで、PRのやり方というものを少し工夫していく必要があるという風に感じております。

【議長】

先ほどの委員のご意見ですとPRという部分に加え、育成する人材像という視点もあったかと思えますが、その点では産短大の育成する人材像と企業が求める人材像というところでは一致しているのでしょうか。

【委員】

求人倍率が10倍を超えているということですので、そこは企業のニーズと一致していると言ってよいと思います。

【議長】

わかりました。他にいかがでしょう。

【委員】

本日は産短大を見学させていただきましてありがとうございます。貴重な機会を頂きました。課題はやはり、生産技術科と電子技術科が定員割れをしているということで、その原因を考える一つのヒントとして、企業ニーズ調査結果にある「生産技術科と電子技術科はイメージしにくい」であるとか、どんなことが学べて、どんな資格とかスキルが身につくのがわかりにくいということがあるという風に受け止めております。そういった中で、先ほどの委員の意見にもありましたが、本県は、県内産業における機械電子産業の比率が全国でもトップクラスであります。このように機械電子産業というのは山梨にとって基幹産業であるので、そこにしっかりと人材供給していくということは重要ではないかなと思っています。で、話を戻すのですが、就職先とか、スキルが身に付くとかイメージしにくいという中で、製造業とか機械電子産業というものは、非常にカテゴリーが広くて、例えば産業用ロボットであったり、半導体製造装置とか装置ビジネスであったり、デバイスも山梨は結構生産量

が高かったり、また鉄鋼関係とか、さらに紐解いていくと機械加工とかもあつたりと、いろいろな分野に分かれております。その広い分野に全て対応しようと思うと、どうしても生産技術科とか電子技術科というように、広く浅く学ぶという形で対応せざるを得ないのかなと思っています。ですので、企業のニーズともう少しマッチングをさせる必要があるのですが、幅広く学んだ人を探ってOJTをして鍛え上げるので、基礎を徹底的に叩き込んでほしいというのが企業のニーズなのか、それとも、中小企業はそこまでOJTに力を入れられないので、即戦力となる人材を育てて欲しいというのが企業ニーズなのかを、もう少し分析をする必要があるのではないかと思います。

そういった中で、あまり偏ったことをするのも危険性がありますが、もう少し山梨の中でこれから伸びていく産業、医療であるとか、そこにターゲットを絞って、そこに特化し授業を、何時間かカリキュラムに組み込んで、できたらそういった企業にも協力してもらって、企業がいまやっていることを実践として学んでいくとか、その基礎を学ぶ時間を設けていくなどしていくと、企業にとっても、より実践形式に近い形で教育された人材を採れる学校だということにもつながりますし、見学に来られた学生も、こういう基礎知識を身に着けられて、こういう企業に就職できる可能性があるのだなと知ることにつながると思います。広く浅くやりながらも、2年生になってからだと思いますが、もう少し専門的なところを、県内の産業に特化した形でターゲットを絞って学んで頂くというのは、一つのアイデアではないかなと感じましたので意見として述べさせていただきます。

【議長】

ありがとうございました。ただいまのご発言に関連してですが、現在定員割れをしている生産技術科と電子技術科の学科名についてですが、これは企業さんからみるとイメージははっきりしているが、子どもさんからみるとはっきりしていないかもしれない。将来の就職先、将来の活躍等のイメージが生徒に伝わるようなPRをしていくにはどうしたら良いでしょうか。

【委員】

企業のもとめるスキルを身に着けた人材が取れる学校だよということをもう少し発信していく必要がありますし、できればそれを学生にも見える形にしてPRしていく必要があると考えます。

【委員】

先ほどの委員の意見と似ているところがあるので、そのまま意見を述べさせていただきますが、「卒業後の就職先のイメージがしやすい募集を行っていく」というところですが、産短大を卒業されて、皆さんいろいろなところに就職されると思いますが、産短大を選ぶタイミングというところが、先ほどのアンケートで高校3年生の4月から12月までが高いパーセンテージとなっていましたので、そこで、就職するか進学するかというのを真剣に悩んでいると思う。そこで、そのタイミングの時に、産短大を卒業された方がどこに就職して、どんな仕事をされているのか、そんな卒業生の声なども交えて、産短大に入学してもらいたいターゲットにPRしていったら良いのではないかと思います。

【議長】

学科名はこのままで良いと思いますか。

【委員】

はい。

【委員】

本日は施設見学を含めて、この産短大の必要性を感じさせられましたので、現在の定員割れを解消し、引き続き、優秀な人材を山梨として育成していただけたらと思っております。ここまでで出た意見と重複する部分もあるかと思いますが、やはり認知度だと、PRをいかにしていくかということが重要だと思う。高校生の時代は、将来学校を卒業して、どういう仕事に就いて、どういう企業に入りたいかというのが、生徒の中で作れていない時期かもしれません。そこをどうリードしてあげるのかというのも我々の役目ではないかなと思っております。で、産短大の離職率は、さきほどの資料の中

で低いという話もありましたが、やはり県内では、我々の会社もそうですが、離職は多いです。入社してきて、自分のしたい仕事と少しイメージが違ったということで、すぐに辞めていってしまう方が多いですが、そこをどう解消していったらよいかというと、やはり在学中に色々な企業を訪問して自分のやりたいことを探してもらおうということだと思います。ですので、企業訪問の在り方、それによって離職率も低下していくのだらうと思います。

あと、質問になってしまうのですが、技術革新に対応していける教育体制というのがここにあります。技術がどんどん進歩していく中で、先生方のスキルアップをどのようにしているのかというのを教えていただけたらと思います。

いずれにしても認知度のアップをどうしていったら良いのか、魅力ある学校だということについて、実績をもう少し踏まえてPRしていった方が良いのか等といったことについても、もう少し分析していった方が良いのではないかと思います。企業によっては、産短大は大学卒と同じ扱いになってしまうため、過去に当社（東京電力）には一人も応募をしている学生はおりません。ですので、そういったことについても分析していった方が良いのではないかと思います。

【事務局】

ただいまの技術革新等への対応、並びに最新の技術の習得に関する質問にお答えします。これについては、厚生労働省所管の施設で、職業能力総合大学校というものがあまして、そちらで研修等を実施しておりますので、そちらの専門技術研修に計画的に職員を派遣することで最新の技術の習得などに取り組んでいるところであります。あとは、交流等により職員の資質向上等に取り組んでいるところであります。

【議長】

ちなみに、校長先生に伺いたいのですが、博士号をもっている先生、技術士の資格をもっている先生はどのくらいいらっしゃいますでしょうか。

【産短大校長】

技術士についてはいないと思いますが、技能検定1級を持っている者はおります。それから修士、博士の学位は半分以上の者が持っております。それから企業での実務経験がある方など、そういう者も多くおりますので、いわゆる博士、修士といった専門的知識、それから企業経験、バランスのとれた形で教育をしております。

【議長】

本日は一部の先生にしかお目にかかれませんでした。女性の先生もいらっしゃるのでしょうか。

【産短大校長】

はい、おります。

【議長】

ありがとうございました。他の方でご意見のある方いらっしゃいますか。

【委員】

本日は見学させて頂きありがとうございました。非常に先生方が熱意をもって教育を進められていて、生徒の皆さんも頑張っていて勉強されている姿を拝見させていただいて、非常に将来が楽しみだなどというイメージを持たせて頂きました。

今回、A3の資料にまとめられている中で、「その他」の「その他」に4年制というところがあります。以前も私は、そもそも短期大学校というものが生徒にとって、需要というか人気が無いのではないかとこのことを質問させて頂きました。この間、私の知り合いでホテルのフロントマンになりたいという子がいて、進学先を検討しているということでしたので、産短大について、こういうところがあるから行ってみたらどうかと紹介してみたのですが、希望とは違うとのことでした。やはり頭の中には4年制の大学があるんですね。そうなってくると、確かに色々な方法で、PRをしたりだとかし

て浸透させていくことも、もちろん重要だと思いますし、やっていかなければいけないと思いますが、ここにあるように、我々が企業側としてこういう人材が欲しいという要望ばかりではなく、実際に進学する生徒さんたちがどういうところに進学したいのか、どういう形態の学校に進学したいのかというも織り交ぜて検討をしていく必要があるのではないかなと思います。けっして産短大を否定しているわけではなくて、そういう変化というものも必要ではないかなという風に思います。

ただ、これを単純に4年制大学にしてしまい、今、産短大に入っておられる生徒さんが今後入って来られなくなってしまうようだと、裾野としては狭まってしまうということになってしまいますので、その辺を兼ね合わせた形で検討していく必要があるのではないかなという風に思います。

また、これは私もあまり認識が無かったのですが、山梨県には工学部は山梨大学にしかないということで、どうしても工学系に進みたいという子たちは、やはり県外に多く出てしまうのだらうなと思います。そして一度県外に出てしまうと、なかなか山梨に就職で戻ってくるということは少ないのだらうなと思います。そうするとやはり、県内で学んで、県内に就職とするという形をもっと太くつくっていく必要があろうかと思しますので、ぜひそちらの方も積極的にご検討いただきたいなと思います。

もう一つこれは、組織が違うのでしようけれども、県として企業の誘致というのを積極的に進めて頂けるように働きかけをお願いしたいと思います。

【議長】

ありがとうございます。将来、4年制も視野にいて、2年制も残しつつ、4年制も生徒の要望に応じられるように変えていくということでございますね。文部科学省の施設になるか、厚生労働省の施設になるかで違うと思いますが、厚生労働省の施設の場合、4年制になると大学卒の資格はもらえるのでしょうか。

【産短大校長】

厚生労働省の施設でも、4年制の大学校を卒業すると、文部科学省の大学院に進学することができるようになります。

【議長】

そういう意味で、ぜひ将来構想として、専門職大学の方の検討も進めて頂ければというご意見でありました。他にどなたかご意見ございますか。

【委員】

今回、学校を見学させていただいて、訓練は非常に高度なことをやってらっしゃると感じました。こんなものができるイメージがついたので、とても良い経験をしたかなと思います。イメージがつかないという意見があったところから、学生が作ったものを校外で発表するような場があったら良いのではないかなと思いました。学生が作った電気自動車を見せて頂いて、ああいうものをものづくり体験講座などで、小中学生に、こんなものを学生がつくれますということを見せていったら、小中学生もワクワクするのではないかなという風に思いました。やはり産短大の認知度を上げるという点から考えると、やはり小中学生もそうですけど、その親へのアピールという意味でも、そういうのが良いかなと思いました。

また、アンケートで、高校の3年生になってから産短大を知ったという方が多いので、やはり自分で探してここを見つけることができないという点が気になりました。自分で進路を決めたいと思っている学生は、自分で探すと思うのですが、やはり産短大に来ると、何になれるのかというイメージがつかないというところから、近くの大人から、こんな学校があるよと紹介されるまで、産短大を知ることがないということになるのではないかなと思いますので、周知という部分をもう少し広げていってもいいかなと思いました。

あともう1点なのですが、企業ニーズ調査の結果で、技術よりもコミュニケーション能力や意欲を重視という意見があるのですが、そこについて、コミュニケーション能力を上げるという意味で、学

生が今後期待する魅力として「サークルや部活動」を期待するという意見が多くありましたので、そういう部分で、学校内ではなくて、学校外でもコミュニケーションをとれるような活動があるようなサークルなどを設けてみてはどうかという風に思いました。

【議長】

ありがとうございました。次の方どうぞ。

【委員】

産短大と甲府工業高校の専攻科でございますが、棲み分けを進めるというか、共存共栄を図っていかねばいけないと思いますけれど、それをさらに進めるには、やはり教員同士の交流を、現在よりももっと踏み込んで、本日のような授業見学のような形の交流が定期的に必要ではないかなという風に思います。お互いに何を教えているかということを知って、その違いで、共存共栄を図るということを考えると、そういった取り組みが、成果を上げるのではないかなと思いました。また、甲府工業高校はSPHの採択を受けまして、5年間、文部科学省の研究支援を受けております。そういったものの情報は産短大の方に提供したり、専門職大学の情報などは産短大から提供していただいたりという中で、差別化を図りながら、技術的な交流を教員同士で進めれば、結果として共存共栄が図れるのではないかと思いますので、そういった観点での取り組みもお願いしたいと思えます。

【議長】

ありがとうございます。校長先生の方から、また何かございますか。

【産短大校長】

今の話は、ほんとうに大切なことだと思います。いろいろなところと交流をさせていただくことが、私たちの教育指導力を高めることになりますので、甲府工業高校も含め、いろいろなところと交流をさせていただくことが、県全体の指導力の向上につながっていくと思えますので、ぜひその点については進めていきたいと考えております。

【委員】

産短大の認知度のところで、とても皆さんが努力してらっしゃるんだと思うのですが、やはり皆さんが就職したい企業として、製造業は二の次になっているのかなという現実は否めないかなと思っています。でも子供の頃は、何かを作るとかは好きで、ものづくり体験教室なんてやるとワクワクドキドキして、目を光らせて参加するという様子が必ずありますので、そういった気持ちを長いこと持ち続けて、うまく就職とか進学とかに結びつけていけるような、なにかものづくりの楽しさを継続できる仕組みのような、長い目で見た対策というのが、産短大を含めて、山梨県全体でできたら良いのではないかなと思えます。私が前に所属していた山梨青年工業会では、毎年そのような取り組みを行っているのですが、応募が殺到するくらい子供たちが集まる行事があります。ぜひそういうようなイベントを産短大の生徒さんが企画して行うなど、そのようなこともあっても良いのかなと思えます。

【議長】

ありがとうございました。産短大の生徒さんがそういう企画をする場合に、山梨青年工業会のような組織とタイアップというか、協力するということは可能性としてございますか。

【委員】

十分にありそうです。

【議長】

ぜひそういうところとの交流も進めていただければと思います。まだご発言頂いていない委員いらっしゃいますか。

【委員】

私どもの方は、ハローワークを運営しておりまして、求人求職を受け付けているということで、こういった人材が企業から求められているのかということは、日常的にかなり感じているところであり

ます。ちょうど、本日の午前中に7月の有効求人倍率を公表いたしました。1.38倍ということで、1人につき1.38件の求人が出されていて、売り手市場となっております。こちらの数字はリーマンショック以来最高で、人手不足としてはバブル期並みの状況という形です。その中で、製造業の求人というのが大幅に増加をしていて、県内の求人数の増加を牽引しているところですので、こちらの資料で山梨県の主要産業が製造業というところとも非常に一致しております。

人手不足は二通りあるかなと思っております。まず人気のない職業ですね、いろいろありますけれど、3Kと言われるような職業です。介護とかは給料が少ない、夜勤があるですとか、きついかとかということで、そういったところの求人倍率が高い。

一方で、求める能力が高い、専門技術職といったところもかなり高くなっている。求人も多く、求職者からの人気もあるのですが、企業が求める能力に求職者が追いついていないということで、ファンクやエレクトロンから良い求人を出していただいているのですが、応募しても採用に至らないというところで、人手不足が生じているところがある。本日、実際に視察させていただいて、ぜひこういった人材をもっと輩出して頂きたいなと感じておりまして、産短大の定員というのはむしろ拡大した方が良くらいの感覚であります。

ここで問題になっているのは人手不足の状況と、少子化ということで、入学者が確保できないというところだと思うのですが、資料にもあったように4年制大学への進学が山梨県では多いですが、全国的にも4年制大学への進学が増えています。そうしたことから、産短大は視点を変えて、就職した方の就職先、それから初任給などそういったものをPRすることで、4年制大学に行くよりも良い就職ができているとかということが示せると良いのではないかなと思いました。これは分析してみないとそういうことが言えるかどうかわかりませんが、そのようなことを思いました。学生さんは売り手市場ということで、大手志向がだんだん高まってきている。その中で、山梨県は中小企業が多いので、魅力のある就職先だよということをアピールするには、もう少し初任給とか休暇制度とか、卒業生が良い就職ができたということをPRすること必要があるのではないかなという風に感じました。

【議長】

貴重なご意見ありがとうございます。ハローワークに来られる方に産短大でもう一度勉強しなおすすめというようなことを勧めて頂くということも可能なのでしょうか。

【委員】

今、少し考えていたのですが、現在は産短大では高校を卒業されてすぐの方がほとんどですが、今子供が減っているので、卒業して就職したとか、進学したけれども自分に合わなかったという方で、20代ぐらいであれば、ハローワークにいらっしゃった方に対して、まだ間に合いますからということで、産短大をご紹介することは可能です。甲府のJA会館に新卒応援ハローワークとかヤングハローワークが設置されておりますので、そちらに若い方がいらっしゃれば、就職を紹介するというのと同時に、本人の希望も聞きながら、産短大を紹介するというのも可能かと思えます。

【議長】

再教育の場ということもぜひお考え頂ければと思います。以上で、一応全員からご発言頂きましたが、皆様からコメントが無かった重大な問題がございます。定員に対してですけれども、定員割れしている生産技術科、電子技術科に対しては、非常に企業からのニーズが高いということですので、今回は定員の見直しはなしということでよろしいでしょうか。はい、ありがとうございます。それから、都留キャンパスへの観光ビジネス科設置を望む声については、企業の訪問調査でも意見があったとのことですが、こちらについて何かご意見のある方はいらっしゃいますでしょうか。ないようですので、これについては、中期的な問題として継続的に議論していくということでよろしいでしょうか。他に皆様のご意見を聞かれたあとで、もう少し意見がある方はいらっしゃいますでしょうか。

【委員】

質問になるのですが、教育内容のところ、社会人としての基礎力を養うカリキュラムが必要ということですが、コミュニケーションというのは就職してからも、職場の仲間とかと意思疎通を図ったり、部署間で何か仕事をする時に協力してやっていかなければならないので、非常に必要になる能力だと思ふ。その他にも離職率が高いという話からメンタル面で抱え込んじゃって会社に出てこれなくなるということも多く話を聞きます。そうしたことにも関係するコミュニケーション能力は非常に重要なと思つていまして、その辺のカリキュラムはについて、現状どのようなことをやっていて、今後どんなことを考えていらっしゃるのかということをお教え頂きたい。

それと、就職してから色々な問題が発生すると思ふが、問題が起きた時の対応策とか、その検証方法、その効果の確認とかの能力が必要になるかと思つますが、そういったところの考えとか、その編のプレゼン能力ですかね、そういったところのカリキュラムで、もし、考えられていたり、現状やっていることがあったらお聞かせいただきたい。

【産短大校長】

学生のコミュニケーションというのは、これまで同級生の中で行われてきた。これが、就職すると縦の関係の中でのコミュニケーションになる。就職したら自分より上の立場の人しかいないという形に、環境が激変する。そうした点については考慮する必要がある。

そうした中で考えていることですが、企業が求めるコミュニケーション能力は、一般社会で求められるコミュニケーション能力というよりも、組織の中で意見を出し合つてより良いものを作つていこうというようなところにあるのかなという風に考えている。特別にそれを取り出してやるという授業は実は、なかなか効果があがりにくいものなので、本日ご覧いただいたような授業の中で、チームをつくつて課題に取り組むなどが身につけていきますので、いろいろな授業の中で、そういうことを取り入れるようにしてもらつてはおります。それがうまく機能しているかどうかまではまだ検証できておりませんが、そういったことを増やしていくなかで、コミュニケーション能力を高めていこうということを行っている。

【議長】

それでは、時間も経過してまいりましたので、議題1はここまででよろしいでしょうか。はい、それでは産業技術短期大学の在り方の検討について、答申に向けた貴重なご意見を頂きましたので、次回は、今回のご意見を踏まえた答申案についてご審議を頂きたいと考えております。なお、今後の進め方につきましては事務局と調整して進めさせて頂きたいと思つます。次に議題2、その他（報告事項）として平成28年度職業能力開発施策の実施状況について事務局から説明をお願いいたします。

（2）その他（報告事項）

平成28年度職業能力開発施策の実施状況

～事務局説明～

【議長】

ただ今のご説明について、何かご質問、ご意見ございませんでしょうか。あの、離転職訓練の就職率につきまして、求人はあつたけれど希望に添えなかつたというのは、修了者の希望に添えなかつたのか、募集側の希望に添えなかつたのか、どちらでしょう。

【事務局】

修了者の希望に添えなかつたものです。

【議長】

修了者の希望がもっと理想が高いものを求めていたということでしょうか。

【事務局】

そのとおりです。理想というか、具体的には服飾科の方では、修了者がファッション性の高い就職先を希望していたのに対し、求人は縫製工場しかなかったとか、勤務形態も時間帯とか休日とかが希望に合わなかったということで、就職に結びつかなかったということでもあります。

【議長】

他にございませんでしょうか。他にございませんでしたら、以上で議事を終了させて頂きたいと思っております。

5. 閉会